

## 質の高い大学教育推進プログラム 実施状況報告書

大 学 等 名	東京大学		
取 組 名 称	P I S A 対応の討議力養成プログラムの開発		
申 請 区 分	教育方法の工夫改善を主とする取組		
取 組 期 間	平成 2 0 年度 ～ 平成 2 2 年度（3 年間）		
取 組 学 部 等	教養学部	取組担当者	山本 泰
W e b サイト	<a href="http://www.komed.c.u-tokyo.ac.jp/tougi/">http://www.komed.c.u-tokyo.ac.jp/tougi/</a>		
取 組 の 概 要	<p>本取組は、本学教養学部前期課程における討議力養成を図ることを目的としている。知的のみならず人格的・道徳的にも成熟した「市民的エリートの養成」という本学の教育理念に照らすと、他者と異なる意見を交わし、自らの考え方の一面性や理解の不十分性に気づき、自らの見方を修正していく討議の力を学生に身につけさせることは不可欠である。また、この取組で開発するプログラムが全国の大学の教育手法の向上に資するように努めた。</p>		

### 1. 取組の実施状況等

#### ①. 取組の実施状況

本学前期課程の教育開発組織（CTL）である「教養教育開発機構（機構長は学部長）」の下にこの取組を位置づけ、多分野の教員 11 名からなる事業推進委員会（委員長は山本泰）を中心に学部の教職員が一体となって事業を進めた。(1) なぜこれまでの調査で、本学部の多くの学生が討議力が身につかなかったと答えているかの分析から始め、指導方法やカリキュラムの問題点を洗い出した。(2) ファカルティ・ディベロップメント（FD）の手法を用いて、スキルや経験を有している教員の授業参観や模擬授業を行い、また国内外で先進的に取り組んでいる教育機関（ハーバード大学など）での研修に参加し、プログラム開発を行った。(3) 討議を行う仕様になっていない教室の改装を行い、討議力養成プログラムのための特別教室を設置した。

学生の討議力を高めるために、討議力養成をもつぱらの目的とする授業を別途開設するのではなく、さまざまな形態の授業に埋め込むことの出来るモジュール（小さなプログラム）をいくつか開発し、多数の授業に埋め込むかたちを取った。平成 21 年度中に基本的なモジュールの開発と環境整備を実施し、文科生を対象とした授業に導入し、22 年度には理科学をを対象とする授業にも展開した。平成 22 年度には文科理科双方の学生を対象として 310 以上の授業で討議力養成プログラムを展開し、のべ 5,200 名が履修した（計画時における目標は授業数 160、履修学生数のべ 4,000）。

教職員の FD 推進や学外への情報発信のためにホームページを活用した。また、新聞・雑誌、テレビなどの取材にも積極的に応じ、多数のメディアで本取組が取り上げられ、多くの反響を全国から頂戴した。平成 23 年 1 月開催の「大学教育改革プログラム合同フォーラム」（主催は文部科学省）など様々な講演会でも招待講演を行った。国際シンポジウムを含め、シンポジウムを 3 つ開催し、全国から多くの参加者を得た。

## ②. 取組の成果

本取組の目的は、学生の討議力を高めることそれ自体ではなく、討議を通してより深い学習の境地に導くことである。実際に展開されている授業は、内容も形態も多岐にわたることから、どのような討議が有用かということも一意には定まらない。本学部の多様な学習現場で成果をあげるためには、まず、個々の教員の教育力を、デザイン力とマネジメント力の二側面で高める必要があった。この目的を実現するために、以下の4つの取組を行った。(1) 教員の課題意識・モチベーションを高めること。(2) 教室という教育環境を大幅に改善して、教員が工夫や改善を実施できるインフラ整備を行うこと。(3) 教員が多様な授業の中で利用できる様々な工夫や装置、仕組みなどをツール(モジュール)の形で整備すること。(4) 教員の授業マネジメントを高めるための補助教員(TA等)を配置し、TA等のスキルを高める研修なども行うこと。

本取組の成果は、教育(学生の学び)の質を高めるにはこのようなシステムの構築が必要であるということを試行錯誤の中で定式化し、実行に移したことである。海外での取組の調査、シンポジウムなどで内外の専門家を交えた意見交換を経ることで可能になった成果である(日本の初年次教育学会や協同教育学会等から支援を得た)。

取組の効果は、具体的には以下のデータに窺うことが出来る。6つの討議型教室(平成21年度に設置)で平成22年度夏学期に展開された授業96個を履修した学生を対象に学期末に実施したアンケート(回答者数1,328)では、「この授業での学習を通して、他者と討議する力が身についた」の設問に、146名(有効回答の11.5%)が「とてもそう思う」、460名(36.2%)が「ある程度そう思う」と回答した(合計47.7%)。また、これらの授業のある例では、「授業に大いに興味を持った」が54.9%であるのに対して、同じ科目の在来型の授業群では39.1%に留まっていた。以下同様に、「友人の考えがよくわかった」は82.4%と20.2%、「先生とコミュニケーションがとれた」は47.1%と10.9%、総合評価「大変満足している」は41.2%と27.6%であり、著しい差違が認められた。さらに、学生の自由記入には、「グループで話す際は、内容が抽象的になればなるほど、自分の話す力、相手の意図をくみとる力、自分と相手の認識の相違を把握して明らかにする力が必要だと改めて感じた」「なぜと問う力という(討議の)まとめは秀逸だと思った。当たり前のことの当たり前さから離れることのできる感度(感性)を持ちたいと思う」などの記述があった。上の(1)(2)(3)(4)の改善が学生の学習の質を深める大きな効果をあげたと言える。

これら96の授業を担当した教員にもアンケート調査を実施した。それらの回答を見ると、「通常より討論や質問が多かった」「不勉強だが、もう少し積極的に討議型教室の使用例を勉強すればよかった」、「お互いの顔が見える為、他者を意識して緊張するのか、受け狙いの発言や程度の低いコメントが姿を消し、討論の水準が上がったように感じられる」、「討議型の授業の必要性をさらにアピールしていく必要がある」、「語学の教室はすべてこのタイプにして欲しい」、「私自身の反省点だが、教師と学生の間やりとりだけでなく、もっと学生間のやりとりを促すよう努力したほうがよいだろう。討議型教室ならそれが可能になる」など、個々の教員が課題意識を持ち、自分の授業改善(FD)に取り組んでいる様子が窺えた。

### ③. 評価及び改善・充実への取組

今回の取組は皆が同じことをやる改善ではなく、一つひとつの授業ごとに異なるものであるために、当初はその進捗を案じるアドバイスを多くの専門家から頂戴した。そこで平成 20 年度と 21 年度を通して、GP 担当者がパンフレットを持って多くの教員の研究室を訪ね、その教員が抱える問題点や GP で出来る支援などについて話し合うという作業を粘り強く進めた。事業推進委員会では学内や海外の実践例を報告して、海外でも討議は自然に出来ているわけではないことを説明し、成果をあげるための条件を議論し、その内容を周囲の教員に伝えてもらうように依頼した。また、学部報（教員と学生向けの学内新聞）に記事を何度も掲載したりするうち、外部のメディア（新聞やテレビ、雑誌）にこの GP が次々紹介されたことも大きな力になった。計 3 回開催したシンポジウムでも、それまで余り関わりのなかった教員にあえてパネリストを依頼することで、駒場の教員の全員が当事者であるという意識が生まれた。

事業の実効ある推進は「体制」を作ることで保証されない。今回の経験を振り返って最も機能したと思われるのは、ピア（社会学で言う「仲間集団」）の力であった。教養学部には、他の大学には例のない「部会」という仕組みが古くからある。それは前期課程の授業を担当する分野ごとの教員集団である（物理学なら物理部会、英語なら英語部会）。そのような教員集団が課題意識を共有し、モチベーションを高めあうことでこの事業の成果をあげることが出来たと思われる。トップダウンでもボトムアップでもなく、ピア（横）の力の強さを実証したことは本取組の最大の成果である。

他方、取組の達成度や学習効果を測る方法についても、多くの手法を動員した。(1) 「学生による授業評価」は毎学期末に教養学部（前期課程）で開講されるすべての授業を対象としている（夏学期の開講数は 1400 余、冬学期は 1200 余）。実施率は毎学期 90%を越えており、ほとんどの授業の様子を詳しく知ることが出来、また担当教員の自己診断のツールとして定着している。(2) 本 GP では、討議力養成に関わる授業を対象に、その質問票に 10 項目ほどの「追加質問」を設け、討議力養成の観点から学生の評価を聞き、担当教員も大いに参考とした（これらの調査結果については前頁で紹介したとおりである）。(3) 教養課程を修了する学生（2 年生）への年度末の調査（教養教育の達成度に関する調査、いわゆる「出口調査」）。(4) 1 号館の討議型教室 6 教室を利用した教員へのアンケート（これについても前頁で紹介した）。これらを用いて、同時多発的に進む多様な教育改善の進捗を監視し、よい方向に導く働きかけを積極的に行った。

さらに、以下の 2 点にも言及したい。(1) 本学のトム・ガリー教授が「討議の文法に向けて (Toward a Grammar of Discussion)」という論文を言語情報科学専攻の紀要に発表した（平成 22 年度末）。これは、大学の教養課程の「討議」にジェネリックに（汎用的に）あてはまる「よい討議」の要件を記述したもので、本取組で行った授業改善の指針を取りまとめている。(2) 22 年度末に『討議力養成授業のための HINTS 10』という小冊子 (A5 版 28 頁) を作成した。これは個々の授業で展開され成果をあげた授業の工夫、アイディア、ツールなど、この取組で得られたノウハウをまとめた実用的なハンドブックで、全国から問い合わせを多く頂き、逐次、送付している。

#### ④. 財政支援期間終了後の取組

本教育 GP における討議力養成プログラムの成果を受けて、東京大学教養学部では、平成 23 年度以降も実施体制、実施環境および財政措置の側面から、以下のように討議力養成のための教育を支援・強化する。

##### ○教養学部附属「教養教育高度化機構」による討議力養成教育の支援

教養教育高度化機構(以下、「機構」と略す)は、教科・学科の枠組みを越えて学部として取り組むべき教育プログラムの実施や、教育部会・学科単位では実施することが難しい教育プログラムの支援を目的として、平成 22 年 4 月に 6 年間の時限付きで教養学部 に 附置された組織である(前出の教養教育開発機構の後継組織)。23 年度には、機構の事業費が一般経費化されたことによって、恒久的組織として教養教育の高度化を推進するための財政的基盤も得られた。討議力養成については、これまで本 GP で行ってきた、基礎演習・ALESS 両科目等への支援(TA 経費、設備整備等)を機構が実質的に引き継ぎ、さらに、ICT を活用した教育環境で展開するために、特任教員・専門技術職員等を機構に配置する予定である。また、ALESS プログラムの実施組織は、機構の国際化部門の 1 ユニットに位置づけられており、継続的なプログラム実施と教育開発・改善の体制が整っている。

##### ○理想の教育棟における討議力養成科目の展開

教養学部では、平成 23 年 5 月に新しい教育施設として「理想の教育棟」が竣工した(<http://www.komcee.c.u-tokyo.ac.jp/>)。この教育棟は、企画段階から討議力養成を含むアクティブラーニングのための「学びの空間」としてデザインされ、館内の 8 つのスタジオ教室では、授業形態に合わせて机・椅子を自由に配置し、黒板や教卓に縛られる事なく、学生・教員が一体となった参加型講義・能動的学習を展開できる。これらのスタジオ教室は、本 GP で学生から高い評価を受けた教室仕様を継承しつつ、それをさらに発展させて、従来比でほぼ 2 倍の教室面積を確保したものであり、本 GP の成果を展開するための教育環境として、23 年度冬学期より基礎演習や ALESS をはじめ、他の討議型科目に利用される。

##### ○今後の課題と問題点

今後の課題としては、理科生に対して、ALESS 以外にも主体的な学びと討議力、問題解決能力を涵養する教育プログラムを提供することが挙げられる。当面は全学自由研究ゼミナール・全学体験ゼミナールで補完するが、必修科目の中に組み込むことが求められている。

**取組名称：PISA対応の討議力養成プログラムの開発 — 日本における国際先端の教養教育の実現—**  
**大学名：東京大学**

○取組概要 他者と討論する力(＝討議力)を教養学部前期課程の学生に養成する

●取組の内容・ポイント

従来の教育の概念＝既存の知識を与える・得る

- 得た知識をもとに自分の考えを組み立て、表現する  
 ←国際化にも対応
- 他者との意見交換を通じ、多角的な視角・より深い理解・新しい知の創出を促す

●取組の成果

授業に討論を組み入れることにより、

- 学習意欲の喚起
  - 学習内容の定着
  - 分析的な思考力の向上
  - プレゼンテーション・スキルの向上
  - 他者との意見交換・自己の考えの相対化
  - 学生間の共同体意識の醸成
- を実現

モジュールの授業への組み込み



討議力養成のための教材 (DVD) の作成

教室の整備



海外研修

ハーバード大、カリフォルニア大バークレイ校・スタンフォード大・南カリフォルニア大にて研修を実施

成果の公表

●学内外からの評価

- 学生からの評価  
 「今まで受けたことのない授業」  
 「自分に欠けているものがわかった」
- 教員からの評価  
 「新しい教室で、学生の反応がよくなった」

外部評価・国際シンポジウム

- 「本格的な教育モデルの開発」
  - 「国際的にも注目される試み」
- 評価の活用

教員のFD活動により、様々な授業の改善に活かす

